

近藤勇と新選組、京都久留米藩邸に出没す

伊東 成郎

☆

明治二年（一八六九）一月二十五日。筑後国久留米城下の寺院で、一人の藩士が切腹した。この日、同藩内では八人の藩士が切腹を命ぜられ、順次、自刃を遂げていったが、この人物も、その中の一人だった。名を久徳与十郎という。

かつて藩主小姓に任ぜられていた久徳は、元治元年（一八六四）五月七日に京都に上り、その後、久留米藩の京都留守居役として活躍した。上京後、ほどなく勃発した禁門の変の際には長州軍と果敢に戦い、関白二条斎敬から、感状なども得ている。

幕末期の久留米藩は、佐幕派が藩政の中枢を担い、尊皇攘夷派の排除を図っていた。こうしたこともあって、久徳も、会津や桑名藩士らと、交流や親交を深めていくことになっていった。

しかし、そんな久徳は、幕府の衰亡とともに、イニシユアティブを取ったかつての藩内急進派から、真っ先に糾弾されることとなる。慶応四年（一八六八）四月、切腹に先がけ、久徳は知行召し上げの上、揚り屋入りの沙汰を受けるが、その罪状は「在京中、会桑などへ深くあい交わり、勤皇の大道取り失い」とされるものだった。これが、かつての同志七人とともに迎えた、切腹という悲劇へと結びつくことになる。

実際、京都留守居役としての久徳は、きわめて積極的に活動をしていた。その片鱗をうかがわせる、大変興味深い資料がある。

それは、在京中に綴られた久徳のメモだった。

「諸藩性名」と題されたそのメモには、実に膨大な数の人名が記されていた。几帳面だったらしい久徳は、藩邸の内外で自身が接触した人名を、それぞれの藩ごとに記録していたのである。

冒頭部に、二条家など公卿諸家の用人などの名前を並べたあと、久徳は、次のような順で、諸藩士の名前を綴っている。紙数の関係で総員の名は割愛するが、各藩ごとに記載者の人数を上げておきたい。なお、藩名と人名は久

徳の表記による。

会津 西郷頼母以下五十名

桑名 福本伊織以下二十一名

会津藩家老 田中土佐、菅野覚兵衛

田辺 安井久米五郎以下三名

中津 藤野彦右衛門以下二名

肥後 藪図書以下二十八名

薩州 大島吉之助以下二十七名

土州 中島小膳以下二十三名

加賀 恒川新左衛門

肥前 坂田源之助以下三名

筑前 永田直次郎以下五名

芸州 三宅万太夫以下十名

小倉 川島才助以下十二名

大垣 小原二兵衛以下六名

福知山 飯田鈎太郎

宇和島 上甲貞一以下三名

津 戸波朋次郎以下六名

小田原 関一膳以下六名

大洲 窪田省吾以下二名

一橋 黒川嘉兵衛以下六名

松山 河東喜一郎以下四名

武州忍 芳賀三太夫以下五名

因州 望月正次郎以下三名

紀州 勢古格太郎

福山 斉藤勘右衛門

岡 里見庄三郎

越前 伊藤友次郎以下四名

備中松山 伊藤泰輔以下三名

彦根 高木口太郎十三名

川越 久松矢一郎以下五名

尾州 蒲伍兵衛以下二名

雲州 石倉廉七以下三名
尼崎 福山衛士
高須 原田武兵衛以下三名
西本願寺 島田右兵衛少尉以下三名
姫路 都築五百助以下五名

公卿関係者を含めて、三百名以上に及ぶ人名が並ぶさまは実に壯観である。そして当時大島吉之助を名乗っていた薩摩藩の西郷隆盛や、後年、会津戦争で一族多数を失うこととなる会津藩家老の西郷頼母など、中には一般によく知られる人物の名も散見される。このメモから当時、京都で活躍した諸藩士一人一人の名前を追ってゆくだけでも、興味は尽きない。

諸藩の筆頭に明示され、頭抜けて多い藩士名が綴られていたのは、会津藩と桑名藩だった。久徳与十郎が仇敵から突きつけられた罪状の文言は、皮肉にも、この両藩の交流人数の異様な多さが、如実に証明することにもなっている。

☆

ところで、この久徳与十郎のメモを見ていた私は、そこに驚くべき一団の人物名を見つけた。末尾近く「西本願寺」と「姫路」の間に記入されていた人々である。

そこに、こんな記述があったのである。

新撰組

近藤勇
武田観柳斎
伊木八郎
浅野藤太郎
尾関弥四郎
竹内元太郎
田中寅三
塚本善之助

そこに並んでいたのは、まぎれもなく実在する八人の新撰組の隊士名だった。そしていずれの隊士も、きわめて個性豊かな顔ぶれだったのである。

京都久留米藩邸は、西洞院通り四条上ルの西側に位置していた。新選組の壬生屯所からは、徒歩およそ十分程度でたどり着く距離である。

局長の近藤勇以下八人の新選組隊士は、某日、連れだつてこの藩邸を訪れたのだろう。そして京都留守居役の久徳与十郎に面談したものと思われる。「諸藩性名」には、御所内で顔を合わせた旨が付記された藩士なども記されているが、近藤勇らは、直接藩邸内で、久徳に会つたのだろう。

新選組の訪問期日を特定する鍵となるのは、四番目に記された浅野藤太郎である。

浅野は、新選組がその名を高めた元治元年六月五日の池田屋事件にも参加した隊士だが、事件からほどなくして、その名を「浅野藤太郎」から「浅野薫」へと改めている。そして、この「浅野薫」の名が初めて同時代史料に登場するのは、同年九月二十三日のこととなる（『北沢正誠日記』）。

したがって、新選組隊士たちの久留米藩邸訪問は、元治元年九月二十三日以前のこととみなければならぬだろう。さらに近藤勇は、それに先がける九月六日に、隊士募集などの目的で、江戸へ帰還の途に発っている。近藤の帰京は十月二十七日のことだった。

元治元年八月某日。近藤以下八人の隊士が久留米藩邸を訪れたのは、折しもその頃のことだったと断定してもいいだろう。

☆

池田屋事件の悲報を受けて、長州軍は藩地から続々と京都に進軍していった。

長州藩らの勢力は前年の八月十八日に、対立する公武合体派勢力のクーデターによって、御所の堺町御門の警備を解任され、京都からの撤退を余儀なくされていた。そこに突如、池田屋事件が起こつたのである。多数の同志たちが京洛の随所で捕殺されたことに激昂した長州勢力は、ただちに大軍で京都に向かった。そして市外の数カ所などに布陣を続けたのち、七月十九日に、ついに御所の周辺などで守備陣と戦闘に突入する。

この戦闘、いわゆる禁門の変に新選組も参戦した。

昼前に御所へたどり着いた新選組は、終盤にさしかかった戦いの中で、「味方討ち死になし。敵方生け捕り一人」（『嘉永明治年間録』）というわずかな戦果を得た。戦い疲れてその夜は宜秋門前で野営した隊士たちは、ついで翌朝、山崎天王山中に逃れた長州系のオピニオンリーダーの一人、真木和泉を攻略するため、会津藩兵らとともに総員で出動した。真木は二十一日、新選組が

差し迫る中、山中で自刃する。

激しい戦闘の決着後、京都ではにわかには長州征討論が沸騰する。はからずも十九日の戦いで長州軍は御所へ向けて発砲をしたとして、朝敵の名を冠されることになってしまったのである。

池田屋事件の戦果によって、それ以前とは比較にならないほどにメジャー化していた新選組も、この大義のある戦闘への参加を、早くから希望していた。

組織を代表する局長である近藤勇の朝廷に対する思いには、磐石なものがあつた。今春、江戸東京博物館で開かれた過去最大規模の「新選組！」展で、私は、展示物の一つである近藤自筆の、とある和歌（市立函館博物館 五稜郭分館所蔵）を初めて見た。その時の感慨は、今なお忘れられない。

をしからぬ 命一とつを二つ三つ 四つも ほしきは 君がためかは

天皇のためならば、この命など惜しくない、いや、そのためならば、いくつであつても欲しい。

後年、長く勤皇志士の仇敵などとされた近藤勇こそ、実に当時の誰よりも、強固な勤皇志士だったのではなかったか。

いつか幕府の一員として派遣されるであろう長州征伐は、朝廷への忠誠心の集約である。だからその日に向けた指針として、我が目でさまざま政治の最前線を見ておきたい。

おそらく近藤勇には、こうした思いがあつたのだろう。そして、屯所から程近い久留米藩邸は、こうした「勉強」のために、格好の場だったのでないだろうか。

また、近藤ら新選組が天王山で攻略した真木和泉は、久留米水天宮の神官という出自でもあつた。新選組による戦後の各種調査の過程で、久留米藩京都留守居役の久徳与十郎とも、なんらかの接触の端緒が生じた可能性もあつたかもしれない。

☆

近藤勇は久留米藩邸訪問に際して、七人の隊士を同行した。このメンバーの人選は実に興味深い。微妙に柔と剛の均衡が見られるからである。

出雲母里出身で、文久三年末ごろに入隊した軍学のキャリアである。最高幹部の副長助勤職にあった。元治元年十月末に、江戸から伊東甲子太郎が参謀として加入する以前は、組織内最高の知識人だった。さらに池田屋事件では実戦に成果をのこすなど、武人的な一面も見せる。

また、武田はブレーン役として、近藤が一時期、もっとも信頼をおいた人物である。藩邸訪問にも、情報分析などに欠くことのできない存在だったとみられる。

伊木八郎

大坂出身と伝わり、池田屋事件にも参加した。慶応二年九月に三条河原で起きた新選組と土佐人たちの戦闘に参加し、組長の原田左之助とともに、一人を斬った。流派は不明だが、剣の度量などは、一応評価されていたとみられる。局長の護衛役として、同伴されたとも考えられる。

浅野藤太郎

芸州出身で、探索方面に力量を発揮した人物だった。一方で、確実な学才も持ち、池田屋事件後に、才能を評価されて副長助勤に昇格したと見られる。

浅野は武田観柳斎と一対をなす、伊東甲子太郎入隊以前の組織内の知識人の代表だった。また、土方歳三にも信頼され、その祐筆を勤めたらしい。このときは、近藤が書記役として藩邸に同伴していたのではないだろうか。

尾関弥四郎

大和高取出身で、会計から人事や庶務まで、初期新選組の後方部門の最高のキャリアだった。いわゆる便利屋として、藩邸訪問には欠かせぬ人材だったと思われる。惜しくも在隊中に病没した。

竹内元太郎

備中松山出身。池田屋事件にも参戦したが、剣歴や学才につながる伝承は伝わらず、この藩邸訪問メンバーの中では、唯一、選抜された根拠となるものはない。

当時、実弟を近藤勇の養子にして、局長との閥閥を築き、新選組内で独特の地位を築いていた幹部隊士の谷三十郎は、竹内とは同郷の出身だった。谷の推挙などが、背後にあったのだろうか。

田中寅三

加賀金沢出身。この藩邸訪問直前の入隊者だった。品行方正な志士と伝わり、のちには沖田総司らとともに、新選組の剣術師範をも勤めたほどの確実な剣の力量を持っていた。

入隊まもない田中を同伴させた背後には、その人物的素養と、剣術の技量を重視した近藤勇の配慮があったものと見られる。

なお田中はのちに隊規違反によって切腹死するが、屈指の剣士ながら、これまでまったく、在隊中のエピソードが伝わっていなかった。その点でも、この久徳与十郎の「諸藩姓名」は得難い史料である。

塚本善之助

久留米藩邸訪問隊士の中で、その履歴がもっとも不明な人物である。唯一、元治元年十一月に土方歳三が記した、当時の新選組総員名を記した「行軍録」に、その名が記されるのみで、出身地も不明である。

この「行軍録」は、長州征伐に出戦した際の新選組の進軍体系を示した形式で記されているが、ここで塚本は、沖田総司の指揮する一番組の一員となっている。

田中寅三同様、このとき塚本は入隊後、間もなかった。おそらく近藤に、特に剣術の力量を評価されて、メンバーに加えられたのだろう。

近藤は、ある者には情報分析や意見のサポートを期待し、またある者には護衛としての役目を任せた。

この久留米藩邸以外にも、近藤勇は随時、精力的に諸藩邸を回り、さまざまな情報収集に尽力したものと考えられる。

多くの隊士を抱えながらも、決して第三者にまかせることなく、自ら積極的に他藩との関わりを模索していた近藤勇。そこには、単なる剣士としてではなく、確たる、政の人としての威丈夫ぶりが、はっきりと見えたような思いがしてならない。

☆

明治二年一月二十五日、このかけがえのない史料を後世に残した、もと久留米藩京都留守居役・久徳与十郎は切腹した。生年不明ながら、その享年は五十歳ほどだったと伝えられる。

：（久徳の）その人となりは朴直で、敢為の氣象鋭く、難に当りては一歩も退かない。風であるから、屠腹の時も毫も臆する色なく、腹十文字に切ったと申します。

（『久留米藩一夕譚』）

壮絶な死を迎える直前、久徳与十郎は、かつて京都の藩邸で出会った壬生のサムライたちのことを、ふと思いついたりはしなかっただろうか。その中心人物の近藤勇が、新政府軍の手によって板橋刑場の露と消えたのは、ちょうど十カ月前のことだった。

そして、久留米藩邸を訪問した八人の新選組隊士の中で、戊辰・箱館戦争が終結した明治二年五月以降も、生存が確認されている人物は、ただ一人、竹内元太郎のみである。

（参考文献）

○『明治二年殉難十志士余録』

鶴久二郎

鶴久二郎発行

○『久留米市誌』（下巻）

久留米市役所

○『三百藩家臣人名事典』（七巻）

家臣人名事典編纂委員会

新人物往来社刊